古代研究二十年

倉塚曄子

卒業論文にスサノヲノ命論を書き、古事記研究の道に入って二十余年を経た。この頃は高木市之助氏の方法に惹かれ、古事記説話を文芸論的に扱ってみたいと考えていた。もっとも氏の方法による研究は数少なかった。当時支配的であったのは、次のような方法であった。古事記説話を解体し原型へとさかのぼり、そこから現在型へと成長する過程にいかなる歴史が反映しているかを探る歴史学的方法、説話の基盤にある儀礼を探る神話学的方法、日本神話の原型を海外に求める比較神話学的方法などである。松村武雄の大著「日本神話の研究」は、第二の方法によって古事記説話の基盤として想定される儀礼を汎世界的に求め集大成した労作であり、学生時代には興味深く参照した記憶がある。これらの方法に共通するのは、古事記が大なり小なりの説話単位に解体され、つねに話の原型が問題になるという点であった。こういう方法はおそらく、十九世紀後半から二十世紀初期まで、欧米で熱狂的に支持された一線的進化主義的歴史観にもとづく研究方法の影響が大きかったと思われる。この方法はダーウィニズムの人類学的適用によって成立したのだが、そこでは常に起源と最高段階に至るまでの過程が問われていた。

ところがその後マリノフスキー、ラドクリフブラウンらに始まる人類学の方法的転換によってこれが否定され、起源や発展過程よりは、現存するものの全体構造を究明することに研究の焦点がおかれることになった。さらに神話の奥にひそむ人間の普遍的思惟構造を問うレヴィ・ストロウスの構造主義的方法（いうまでもないが、この構造とラドクリフ・ブラウンの構造とはまったく意味が異る。）も人類学研究においてめざましい成果をおさめるようになった。

この両方法を古事記研究に見事に適用させた一連の労作が昭和四十年頃から世に問われるようになった。西郷信綱氏の業績である。ここに示された古事記のよみの方法は、現在ある古事記を全体的構造をもつ一作品として読むというやり方である。一説話の各部分また諸説話は、それぞれ前後と意味連関をもち、古事記全体がそれらの諸関係の束としての構造をもつとみる。それがいかなる構造かをあきらかにしようとするのである。従ってここでは原型や説話の成長過程は問われない。説話の枠組を作るのに役立った儀礼は問題にされるのだが、それはあくまでも説話そのものの構造をあきらかにするためである。この方法によって今まで十分わからなかった話の意味が解読されたという例は少なくない。たとえば、結局は葦原中国の荒ぶる神の頭目としてことむけされることになるオホナムチノ神を英雄としてたたえるがごとき出雲神話が古事記にのみ大きくスペースをしめていることの意味などである。

作品のよみの方法は様々ありうる。作品は享受者と共に歴史的に生成するといわれるゆえんである。その際恣意的なよみか否かをきめるのは、そのよみがどれだけ多くの他者の共感を得られるかという点である。従来の起源遡求的方法に真向から対立する後者の方法は、必ずしも多くの専門研究者に支持されているとはいいがたい

が、専門をこえた他分野の研究者また一般読者の広い共鳴をえている。

ところで私自身は、卒業論文以来文芸論的方法をうまく展開することもできず、どちらかといえば歴史学的方法に引きずられて中途半端な研究を続けていたが、古事記全体の構造的連関を問いつつよむという方法に大きな説得力を覚え、不十分ながらこの方法で古事記説話を解釈する仕事を昭和四十三年頃から何年か続けた。

よむうちに、神話時代に大きな社会的機能を果していた女の呪的霊能の歴史が、古事記成立に大きなかかわりをもっていることを知り、研究の焦点がそちらにうつっていった。（稗田阿礼は女に違いないと私は考えている。）女の呪的霊能をテーマとするなら、現在なおそれが生き続けている沖縄を視野に入れないわけにはいかなかった。沖縄のオナリ神信仰である。

オナリ神信仰と対比させつつ古代日本の巫女の在り方を探るうちに、このテーマが実に広い射程をもつことに気付いた。問題は古代にとどまらない。巫女の霊能が、制度化された国家にとって邪魔になってきた時、巫女の（ひいては女の）疎外が始まる。疎外された巫女は体制の外で底辺層の庶民の精神の救済を続けた。現代の科学的合理主義一辺倒の社会では見落され勝ちだが、この精神史的水脈はなお生き続けているのである。巫女の霊能の歴史は女の精神史の一側面であるといえる。

現代まではとても無理だが、せめて古代末までを見通してみたいという思いで、疎外されていった巫女と、彼女たちの世界と接するところにいたと思われる遊女の研究を始めたいと考えている。もっとも本格的にそれを手がけるのはまだ先のことになりそうである。というのは、社会の上層で巫女の伝統がいかように続きそして断たれていったかをはっきりさせるために、ヒミコから称徳に至る女帝の歴史を逐一たどってみたいと考えているからである。

このように私の歩みは、古代文学研究からはかなり離れてしまったが、研究の基本になるのは、資料やテキストをよむことにある。今神功皇后論に取りかかりながら次のことを痛感している。意図した構造にもとづいて必要な限りの説話しか選ばなかった古事記は、その代りに一語一語に予想以上の深い意味をこめているのではないか。前後の文脈における連関を見究めながらそれをよみとらねば、古事記がよめたとはいえないのではないかということである。より多くの享受者の共感を得られるようなよみの方法をつねに探りながら、研究をすすめたいと考えている。